

## 御国における順位

(マルコ10・35〜45)

## 一、聖書と私たち

キリスト教会が神のことばとして受け止めている聖書は、実に不思議な書であると思います。初めて聖書を読む方、あるいはそれほど前後関係のことを考えないで読まれる方は、読んでいて自分が心に留まる聖句を見つけては「いいことが書いてある。聖書はすばらしい」と思ったりするものです。

ですが、この読み方からもう一步奥に踏み込んで、この書の背景は何なのであろうか、自分が今読んでいる箇所は何を語っているのであらうか、という関心を持って読むようになりますと、それまでとはちがった味わいを体験することになります。

さらに聖書を深く読もうとするなら、「この箇所にはこんなことが書かれている」だけでなく、自分から聖書に問いかけて行き、結果として聖書と対話をするようになりますと、またまた異なる味わいを体験するようになります。こうして聖書は、何回読んでもそこに発見があり、あるいは新たな質問が出てまいります。

## 二、ゼベダイの息子たち

ゼベダイの息子たちであるヤコブとヨハネは、主イエスから声をかけられて、お従いすることになりました(マルコ1・19〜20)。弟と思われるヨハネは、以前バプテスマのヨハネの弟子だったようです。主イエスは、ペテロとヤコブとヨハネを側近中の側近としておられたようで、他の弟子たちは、羨望のまなざしで見えていたことと思われま。そういう雰囲気の中で出来事でした。35節です。ゼベダイの息子たち、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちが願うことをかなえていただきたいのです。」と。すると、イエスさまはおっしゃいました。36節です。イエスは彼らに言われた。「何をしたいのですか。」と。二人は言いました。37節です。彼らは言った。「あなたが栄光をお受けになるとき、一人があなたの右に、もう一人が左に座るようにしてください。」と。ヤコブとヨハネは、どのような思いから願ったのでしょうか。「他の弟子たちより偉くになりたい」という思いはあったことではありません。ですが、他の思いもあつたようです。イエスさまのお役に立ちたいという願いです。二人の願いは的外れでしたが、主イエスは退けられませんでした。38節です。しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲む杯を飲み、わたし

が受けるバプテスマを受けることができますか。」と。二人が「できます」と答えると、主はおっしゃいました。39節の途中からです。正確にあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることになりません。」と。ここに、人として歩まれていたイエス・キリストに神性が現れています。ヤコブは、このことばを語ってから十四年後にヘロデ・アグリッパ一世によって殺され、殉教の死を遂げました(使徒12章)。一方のヨハネは長く生き延び、主の栄光を現しました。

## 三、御国における順位

41節をご覧ください。ほかの十人はこれを聞いて、ヤコブとヨハネに腹を立て始めた。」とあります。なぜ、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めたのでしょうか。「おれたちを出し抜いて、自分たちだけが偉くなろうとした」と思ったからではないでしょうか。と言ふことは、十一人の弟子たちは、それぞれに同じことに関心を抱いていたことになります。「人よりも高い地位に就く人より出世する」は、時代と文化を問わず、多くの人々を動かしている動機です。ですが、主イエスはおっしゃいました。42節から44節です。マルコ10・42〜44。この聖句を読んで、「私は人よりも偉くなりたいので、しもべの姿をとります」と受け取ってしまいま

すと、罪の問題、すなわち神から離れている問題が、一向に解決されません。こういうふうには受け止めたら、いかがでしょうか。もし自分が責任のあるポジションに就くことがあったら、主イエスのように振る舞ったらよいと。

ですが、それよりも聖書から次のように考えたらいかがでしょうか。私たちはそれぞれに異なった賜物を授かっています。ローマ人への手紙12章6節から8節までを引用します。ローマ12・6〜8。これは、教会における務めのことを語っていますが、もう少し適用を広げてもかまわないと思います。たとえば、指導する賜物を持った人は、賜物が発揮される際、人の上に立つようになり勝ちです。その際、主イエスのように、しもべとして、自分が授かったいのちを分け与えるような思いで振る舞ったら、いかがでしょうか。45節に、人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」とありますから。

パウロが解き明かした福音のことにありますように、「私たちには、それぞれ異なった賜物を授けられている」という考え方を受け入れますと、順位・序列という縛りから解放されます。そういう受け止め方こそ、御国に生きる価値観ではないでしょうか。